HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 荒野を描く ： テレビドラマ『だから荒野』における炭鉱と原爆 |
| Author(s) | 楠田, 剛士 |
| Citation | 層 ： 映像と表現, 12, 4-20 |
| Issue Date | 2020-03-10 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/92297 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/76893 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | Kouya.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 荒野を描く
## ――テレビドラマ『だから荒野』における炭鉱と原爆

楠田　剛士

### 1　はじめに

テレビドラマ『だから荒野』は二〇一五年にＮＨＫ・ＢＳプレミアムで放送された（全八回）。家族と決別した主婦の森村朋美が、長崎原爆の語り部である山岡孝吉らと出会いながら、生き方を見つめ直していく物語である。原作は桐野夏生の長編小説『だから荒野』で、東日本大震災の翌年二〇一二年に新聞に連載された。ドラマが放送された二〇一五年は被爆七〇年にあたる。小説もドラマも家族問題と原爆が大きなトピックになっているが、ドラマでは、山岡の弟子である亀田という若者が炭鉱に関わりを持ち、朋美や次男が閉山して寂れた炭鉱の島に案内されるという、小説にない人物設定や場面が描かれる。ロケ地になった長崎の池島はドラマ第五回と最終回のみに登場するものの、第五回から最終回までタイトルバックで映され、ＤＶＤのパッケージ（下図）やオリジナルサウンドトラック（大島ミチル）のジャケットにも使用されている。廃墟となった炭鉱はドラマ全体を包括的するイメージになっている。

拙稿で述べたように、炭鉱と原爆の関係はフィクションの中で繰り返し描かれてきた[1]。東日本大震災とそれに伴う福島第一原子力発電所の事故を契機に、国のエネルギー政策に翻弄されてきた炭鉱と原発の関係についても見直されている[2]。フィクションであってもドキュメントであっても、炭鉱と原爆、原発に注目することは、それに支えられた社会のあり方や人間の生き方を問うことにつながっている。本稿では現代における炭鉱と原爆を描いたフィクションとして、テレビドラマ『だから荒野』を取り上げ、繰り返し登場する「荒野」のイメージの内実を検討し、その問題を考察する。

## 2　テキストの変遷と評価

ドラマの考察を行う前に、原作のテキストについて確認しておきたい。小説『だから荒野』は、「毎日新聞」二〇一二年一月一日朝刊から同年九月一五日朝刊まで連載された[3]。初刊は毎日新聞社から二〇一三年一〇月に刊行された。巻末に「単行本化にあたり、大幅に加筆・修正しました」と記されている。再刊が文春文庫として二〇一六年一一月に刊行された。異同について何も書かれていないが、読み比べると単行本のテキストが若干修正されていることが分かる。

小説には初出、初刊、再刊の三バージョンがあるが、ドラマも含めて物語の大まかな流れは共通している。主婦の森村朋美は、ハウジングメーカーに勤める夫の浩光、大学生の長男健太、高校生の次男優太と暮らしているが、身勝手な家族から蔑ろにされていると感じながら日々生活している。四六歳の誕生日にとうとう家族と決別し、夫の車を運転して西へ向かう。途中で車を盗まれるが、山岡という老人と、その手伝いをしている亀田という青年に助けられる。東北の被災地をまわる被爆講演旅行から帰る途中だった二人の車に同乗し、長崎に到着する。朋美は山岡の家に仮住まいしながら、山岡を手伝うようになるという内容である。

新聞連載と単行本の最も大きな異同は結末部に見られる。初出では朋美と山岡の姪が話をした後、朋美が山岡の家を出て、タクシーで街まで下り、店に入って山岡への手紙を書くというものだった。それが初刊では、家を出た後にまた戻って姪に言い返し、山岡と別れの挨拶をしてから東京に戻るという内容へと加筆修正されている。ドラマには姪は登場せず、結末も全く異なる。

細かい異同は五種類に分けられる。まず①部分的な加筆である。たとえば第五章における、原爆投下時の山岡の実家の被害状況、狭い急坂を上らなければならない山岡の家の不便さ、ボ

ランティアの担当曜日が「火曜、木曜」から「火曜、木曜、土曜」に増えることなどがあるが、物語の流れを大きく変えるものではない。②語順の入れ替えも軽微なものにとどまる。③明らかな誤記の訂正がある。第五章で山陽道から「東九州自動車道」に入ったとあるが、初刊のように「九州自動車道」が正しい。④語句の変更については、朋美の母の年齢が「七〇歳」から「七三歳」、親友の知佐子との再会が「五年」から「一〇年」ぶりになることなど、やはり流れを変えるものではないのがほとんどである。初出で「東北大震災」とある箇所は、その後の報道が踏まえられ初刊では「東日本大震災」と表記される。⑤語句の削除もあるが数は少なく、軽微である。

文庫は単行本をベースにしているが、この両者にも若干の異同がある。朋美と山岡が初めて出会ったとき、初出・初刊では山岡は「紺の上着」を着ているが、文庫では「灰色の上着」になっている。これは後の箇所（福島での講演ＤＶＤ）で山岡が「灰色のジャケット」を着ていることに合わせた修正であろう（「灰色のソックス」もいつも穿いている）。山岡が普段ボランティア説明員をしている学校について、初出・初刊では「先ほどの小学校」とあるのが、文庫では「先ほど」が削除されている。山岡は戦時中「国民学校で代用教員」をしていた経歴があるが、「先ほどの小学校」がこの学校を指すとすれば、山岡はかつて自分が勤めていた学校で現在ボランティアをしていることになる。そのようなつながりは現実にもあり得そうだが、「先ほど」が削除されることで、山岡はかつての勤務先とは無関係に説明員をしていることになり、①の担当曜日の追加も合わせて、活動の自主性・積極性を印象付けている。他にも買い直した車が、初出・初刊ではベンツの新車だったのが文庫で中古に変更された。第一章で説明される朋美のショルダーバッグは、初出・初刊は「御殿場」のアウトレットだったのが、文庫では「佐野」に変わっている。これは後の第三章で朋美が御殿場のアウトレットに立ち寄っていることから、場所の重複を避けたものと思われる。

やや長くなったが、本作の加筆訂正は以上のように行われている。小説前半の家出については特筆される異同はなく、後半は結末部をはじめとして山岡に関する部分の異同が目立つ。前半については、連載前からある程度内容と構想が決まっていたからだろう。連載直前の新聞記事[4]でも「ばらばらに壊れてしまった家族から失踪する主婦の物語」だと予告されており、同記事で作者の桐野も「『失踪』というと暗いけれど、『逃亡』をイメージしています。妻の方がだんだん態度を硬化させて、ハードな話にするつもりです」と、家族・夫婦に力点を置いた創作意欲を語っている。連載後の記事[5]でも桐野は、朋美が

家出し長崎に向かうところまでのプロットは作っていたというが、その先は決まっていなかったことを明らかにしている。長期の新聞連載を始めるにあたって事前にプロットを作ることは当然であり、長期連載中に当初の予定から変更していくこともまた十分あり得る。連載前に作者は「欲望の果てのようなものを書いてみようと考えています」と語っているが（注4に同じ）、具体的に小説のどの場面に書かれたのかは分からない。第一章で長崎に行く理由が元恋人の酒井典彦に会うためだと書かれているので「欲望の果て」もそれに関連したものではないかと推測されるが、実際の連載では酒井にほとんど出番がなく、重要性は低くなっている。

桐野は連載の行方が決まっていなかった理由について「昨年起きた大震災と原発事故が片時も心を去らないままに書き始めたものですから、朋美は西へ向かうのではなく、東の被災地へ向かうべきなのではないか、と何度も考えたからです」と述べている（注5に同じ）。連載前には語られなかった震災や原発事故のことが、ここでは執筆背景にあるというのだ。続けて以下のように述べている。

しかし、主人公が被災地に行けば、物語のベクトルはある程度決まってしまいます。違う形で心が寄り添う方が、被災された当事者の方にとっては、よりリアルなのではないか、と考えたのは、取材で長崎に行った時でした。

ご存じのように、長崎はプルトニウム型の原爆が投下された市です。

山里小学校の原爆資料室や、原爆資料館、そして立山防空壕などを見学している時に、「山岡」という老人の姿がふと浮かびました。原爆で許嫁や教え子たちを亡くし、以後、核廃絶を訴えて大量死の無惨を説き続ける人間です。

私の小説には、「山岡」のような主張する人物が登場することはほとんどないのですが、今回だけはどうしても書きたいと思いました。

この言葉を信じれば、山岡という語り部の存在は執筆前の構想にはなく、執筆開始後の長崎取材以降に創造されたことになる。ただし山岡が原爆で許嫁を亡くしているという作中と異なる箇所もあり、作者の発言をストレートに受け止められるわけではない[6]。それでも、山岡を「どうしても書きたい」人物として強調していることや小説後半の異同の質と量を考え合わせれば、作中に山岡を登場させたことは作品成立において重要な

のは確かである。

このように、異同の少ない前半の家庭・家族からの決別は、作者の当初の構想が生き続けていることを示し、異同が目立つ後半は、当初の構想になかった山岡の存在感が連載中・連載後に高まっていったことを示す。異同から窺える作品の傾向は、先行評における注目点とも重なる。

井口時男は[7]本作を「旅の試練を経て主人公が成長していく」「中年主婦の「教養小説」」だとし、「どこにでもいそうな家族の面々が欠点や弱点をちょっと誇張され戯画化されて、生き生きと造形されている」と評する。山岡については「成長の旅には人生を教える老師が登場するものだ」とコメントする。「人生を教える老師」という表現は真理を悟った人物のような印象を与えるが、小説では頑固さや短気な気性も見せており、山岡も「欠点や弱点」を抱える人物として「生き生きと造形されている」といえる。

速水健朗は[8]「家族崩壊の問題に真正面から向き合った」作品であるとし、クルマやドライブシーンを通じて「家族の関係性の摩耗」や「お互いを再発見し合う場面」が描かれているという。これに付け加えれば、本作の車は乗り物としてだけではなく、いままでの家族を捨てて旅立つ朋美の新しい「家」の意味もある。速水の関心は「小説の屋台骨は、あくまで朋美の長崎までの気ままなドライブである」と述べるように小説前半にあり、山岡との関係については十分に説明されていない。

茶園梨加は[9]、原爆の語り部としての山岡に注目する。「原爆とも被爆者とも直接関わりがない日常を過ごしていた」朋美にとって「原爆の語り部山岡は最も遠い存在であ」り、山岡の言葉は「自分を遠くへと運んでくれる言葉だった」と述べる。「原爆とも被爆者とも直接関わりがない日常を過ごしてい」るのは小説の読者の多くにも当てはまり、読者にとっても山岡は「遠くへと運んでくれる」存在になるだろう。

このように原作の小説については、家庭からの逃亡、山岡との出会いに注目されてきた。先に見たように、作者自身も妻の逃亡や山岡という人物を書きたかったのだと発言しており、異同のありようにも反映されている。

しかし、作品には作者が書きたかった山岡だけではなく、山岡の弟子と名乗る亀田も同時に登場している。亀田は東北の被災地での山岡の講演活動を世話し、長距離移動のドライバーを務め、長崎に戻ると山岡の車や現金や預金通帳を持ち逃げして行方をくらます。拙稿で述べたが[10]、山岡は亀田との出会いによって被災地での講演や、今まで語ったことがなかった原爆以前の妹の死について語るという「得難い経験」をしており、朋美にとっても家出して初めて心情をさらけ出す相手になってい

る。亀田は第五章のみに登場するが、物語全体において果たす役割は決して小さくない。

ドラマの亀田は小説と異なり、長崎に到着する前に姿を消し、その後再び長崎の山岡の家に現れ、しばらく生活を共にする。老婦人への詐取、朋美を追いかけて長崎に来た優太とのやりとり、炭鉱との関わりなどドラマで描かれるシーンは多い。原作になかった「章吾」という下の名前も付けられており、原作以上にクローズアップされていることは明らかである。以下、ドラマにおける亀田の役割に注目しながら、作品で繰り返し描かれる「廃墟」「荒野」のイメージについて考察していく。また、小説の結末部には「逃げ回れば、どこまでも荒野が続く」「荒野を沃野に変える努力をしなければならない」という朋美の考えが記され、「荒野」と「沃野」が対比されている。荒野から沃野への変化にも注目したい。

### 3　ドラマの表現

ドラマの制作統括者である銭谷雅義は、ドラマ化にあたって原作者の桐野夏生から次のようなことを言われたという。

> 連続ドラマとして面白くするために、恋愛軸が付け加えられていますが、原作にはありません。ドラマでも恋愛軸は描かないで下さい。それがとても難しいことなのは分かります。この小説は連続ドラマとは親和性がないかも知れない。それでも敢えてドラマにしたいとおっしゃるなら、この禁じ手を守って下さい[11]。

桐野に見せたという「恋愛軸」を含むプロットが具体的にどのようなものかは語られていない。桐野からこう言われて「脚本を書いては直し、書いては直し」たと述べていることから、原プロットと実際のドラマ内容を比較することはできない。ドラマにおける朋美と宮内繁との再会は原作にはないので、「恋愛軸」に関わるとすればこの部分だろうが、再会以上の展開はなく、むしろ恋愛のし難さが語られている。前節で見たように、作者の発言の力点は連載前と連載後を比べると、家族・家庭から震災・原爆へ移っている。第一章で長崎に向かう理由になっている元恋人の酒井典彦が、その後の物語ではほとんど存在感がないことから、原作者にとって『だから荒野』は恋愛軸のない物語になったのである。

銭谷は「恋愛軸のない連ドラ」を成立させるために「朋美、山岡、章吾、優太らがそれぞれ抱えている「生き辛さ」の背景を、ひらすら彫り込んでいくしかありませんでした」と述べて

いる。また脚本担当の浅野妙子は「定番のドラマツルギーからは、はずれ」、「現実を、粉飾せず、ありのままに描く」ことの難しさを語り、演出担当の渡邊孝好は撮影が「文字通り原作通りの荒野を彷徨う旅のようでした」と苦労を明かす[12]。タイトルの「荒野」は作中人物にとっても制作者にとってもキーワードである。

以下ドラマにおける「廃墟」「荒野」のありようを検討していきたいが、活字表現の小説と映像表現のドラマの比較は容易ではない。前節のはじめに述べたように物語の大筋は共通しているので相違部分を手がかりとする。『だから荒野』ＤＶＤボックス所収のブックレットから各話のあらすじを引用し（注12に同じ）、そのあとに考察を加えていく。

第一回「逃げる主婦」

専業主婦の森村朋美は、四六歳の誕生日に家族を外食に誘う。しかし次男の優太はドタキャン。夫の浩光はママタクならば行くという。家族から祝いの言葉もなく、バカにされ堪忍袋の緒が切れた朋美は席を立ち、家出を決行し、高速道路で一路西へ。朋美はサービスエリアで裸足の百音を拾いホテルに泊まるが、翌朝、百音は朋美の車と共に消えていた。

朋美を演じるのは同じ四六歳だった鈴木京香、浩光は杉本哲太である。小説では高速道路に乗るまでに新宿ワシントンホテルに一泊し（第一章）、高校時代の友人滝川知佐子と再会しているが（第三章）、ドラマでは初回から高速道路に直行するため小説よりも展開が早い。実家に向かう途中で夫に置き去りにされたという桜田百音（小野ゆり子）をサービスエリアで乗せるのは同じだが、小説ではサービスエリアの休憩中に車を盗まれ、ドラマでは一般道沿いのラブホテルに入り、酔って寝た隙に盗まれている。また、小説での知佐子との会話の一部がドラマでは桜田との会話に利用されている。小説で朋美にコーヒーをおごるトラック運転手の滝田はドラマでは富田（でんでん）となり、一般道でヒッチハイクしている朋美を途中まで同乗させる。「滝田」から「富田」に変名された理由は不明だが、知佐子の名字である「滝川」とはっきり区別できる。

桜田に車を盗まれ、富田に主婦売春と誤解され、家族から心配する連絡もない朋美は雨に降られる。雨宿りできるバス停を出て、未舗装道路を歩き「もう何もない。空っぽだ。ここは荒野だ。独りぼっち。だけど一人で何が悪い」と考える。このあと山岡孝吉（品川徹）と亀田章吾（高橋一生）の二人組に助けられるので、未舗装道路の「荒野」が沃野でもあることが示されている。

この未舗装道路は第一回から第四回までタイトルバックに使われているので重要な場所であることは言うまでもないが、その直前のバス停の場面にも注目したい。雨宿りしていた朋美が、クラクションを鳴らした大きなトラクターに驚きつつも行方を眺め、やがて雨に打たれながらバス停を出る。雨の中でも力強く突き進むトラクター（牽引車）が、朋美を荒野へと導いたような場面になっている。

第二回「もう一つの人生」

朋美は、旅の途中で出会った亀田章吾と山岡孝吉の車に乗って長崎へ向かう。途中、朋美は山岡から長崎での被爆体験を聞く。その夜、朋美は章吾たちに家出してきたことを告白する。夜が更け、章吾が朋美の部屋にやってくるが朋美は拒む。一夜明けると章吾は消えていた。朋美は山岡を乗せて長崎へ。ネットカフェに泊まった朋美は、次男・優太のブログを見つける。

あらすじには書かれていないが、朋美は山岡たちに旧姓の「大野」を名乗り、山岡たちには最後まで「大野さん」と呼ばれる。朋美は家出については山岡たちに打ち明けるが、旧姓については最後まできちんと説明していない。亀田や山岡のような語らない秘密が朋美にも持たされている。

長崎への移動は小説では高速道路のみ、ドラマでは一般道と高速道路を走る。静岡からではその日のうちに長崎にたどり着けないため、途中で宿泊する場面が加わる。長崎に到着する前にここで亀田はいなくなるが、朋美に声を掛けて乗車させる出会いをはじめ、山岡のことや講演旅行について説明する場面や夜に来室する場面、朋美が亀田と二人きりのとき初めて家出を打ち明けることや、小説では山岡のセリフだった「雄々しい」という朋美の形容がドラマでは亀田のセリフになることなど、ここでは山岡よりも亀田の行動や発言が目立つ。

小説では長崎到着後から朋美は山岡家に滞在するが、ドラマではネットカフェでしばらく寝泊まりする。そこで朋美は優太が「ＹＵＴＡ」の名で書いたブログに、現在の家が「砂漠の中の小さな家」になり「みんな死んでいる」と書き込んでいるのを見つける。第三回では「砂漠は、荒野になった」と書き込まれる。ネットはそれまで、優太が部屋に引きこもって中毒になるほど荒んだ場所（荒野）だったが、優太の本心や家庭の現状が書かれることで、朋美が優太の抱える悩みに寄り添うきっかけとなり、最終回では語り部の会を知る手段にもなっていることから、沃野としての意味を持つようになる。

第三回「初恋の男」

朋美は初恋の男・宮内繁に再会するが、かつてのりりしい面影は失われており、失望する。浩光はゴルフサークルの竹内から女性会員へのセクハラを疑われ、母の美智子にも妻の家出を知られてしまう。三浦の水産食堂でバイトを始めた朋美は、忙しい中、山岡に付き添う破目になり、助けを求めて章吾の勤務先に電話するが、該当者不明との返事に当惑する。

宮内繁（豊原功補）との再会と、三浦（泉谷しげる）の食堂でのアルバイトはドラマオリジナルである。朋美が長崎を目指す理由となる、元恋人の酒井典彦は長崎の実家で仏具店を営むが、ドラマでは登場しない。小説の宮内は、朋美の中学の「二年先輩」で「違う高校に行」き「金沢の大学に進学した」噂があり、ネットで調べても分からない人物になっている。ドラマの宮内は、朋美と高校時代に交際し、現在は長崎の老舗焼き物屋に婿入りした人物であり、小説の宮内と酒井を合わせたような設定になっている。

山岡は「潮浦小学校」の祈念館で語り部のボランティアをしているが、校名はモデルになった長崎市の「城山小学校」をもじっている。ボランティア中に怪我をするのは小説でも同じだが、ドラマでは病院に行く。帰宅後、山岡が「長崎の街は一瞬にして瓦礫となりました。幼い私はその瓦礫の中に立ちました。私が見たのは焼けただれた父と母だったのです」と語るが、その場面のあと、山岡少年の回想映像が流れ、現在の祈念館に飾られている「廃墟に立つ少年」の写真と、それを見つめる亀田の姿へ切り替わる。第三回に登場する「荒野」はこの被爆後の廃墟である。

この写真にもモデルがある。米海兵隊のジョー・オダネルが撮影した「焼き場に立つ少年」である[13]。元の写真の少年は幼児をおんぶ紐で背負い、右手を真っ直ぐ下げ、画面右に向かってに直立の姿勢を取っている。それに対してドラマの少年は荷物をたすき掛けし、下げた左手で拳を握り、画面左向きに向かって直立している。赤子は背負っていないが、逆にそのことで被爆死した妹を含む無数の死者を背負っているかのように見える。原爆後の「荒野」は、その語ることのできない死傷者たちのために語り部活動を行う山岡の出発点である。

第四回「母親失格」

朋美はネットカフェを出て山岡の家に居候することになり、生活費を山岡に渡す。ある日突然、山岡家のガスが止まる。朋美が問い合わせると、料金未納のためだと

回答され不審に思う。山岡は原爆で生き残った自分を罪深いと思い、生涯独身を貫いたという。朋美は、「優太ならあげるわよ」と親友の知佐子に言ったことを山岡に告白し、自分は母親失格だという。

小説の滝川知佐子は千葉に住み銀座のデパートで働き、高速道路に入る前に朋美と再会する。ドラマの知佐子（ＹＯＵ）は福岡で美容院を経営しており、朋美とは長崎で会う。

知佐子はネットカフェ暮らしの朋美を心配して福岡の家に来るように誘うが、元恋人と復縁したため寝泊まりの話はなくなる。行き先がない朋美は、怪我した山岡を家に送ったときに山岡から寝泊まりしてよいと言われたことを思い出し、爆心地と長崎原爆資料館を訪れた後に山岡の家へ向かう。この資料館にも「廃墟に立つ少年」が展示されている。亀田もまた前回、祈念館で「廃墟に立つ少年」の写真を見学し、爆心地を訪れている。山岡の怪我をきっかけに朋美は再び山岡家にやってきたが、亀田も自分の怪我をきっかけに山岡に家にやってくる。葬式泥棒や老婦人（加藤桂子）に近づく場面を通じて、亀田の「荒野」が少しずつ描かれていく。

第五回「息子の家出」

章吾が顔に傷を負って、山岡家に転がり込み、朋美は、章吾に不信感を募らせる。一方、そのころ、次男の優太が家出して長崎に来る。朋美は、山岡に付き添って祈念館に行くよう優太に命じる。入場者に無視されながらも、原爆の悲惨さを語り続ける山岡の姿に、優太は、強い印象を受ける。朋美は章吾への疑いを山岡にぶつけるが、山岡は章吾を信じているという。

最終回で亀田が池島にルーツを持つことが明らかにされるが、今回からタイトルバックが池島の廃墟に切り替わっており、池島の持つ意味がこの回だけで終わらないことが暗示される。

亀田は小説では二度と現れないが、ドラマでは再登場する。認知症の老婦人のボランティアをしていたが、婦人の甥から財産の乗っ取りを疑われ、顔を殴られていた。東京の自宅を家出した優太（濱田龍臣）も山岡家に寝泊まりし始め、小説になかった亀田と優太の交流が描かれる。長男優太（前田公輝）が第七回で彼女と別れたあと「優太にもっと優しくしとけばよかったなあ」と反省しているが、亀田は優しい兄のような存在として優太に接している。

交流の中でも特に重要なのが、山岡の講演と、それをきっか

けにした池島行きである。優太が語り部の山岡の姿に強い印象を受けたのは、祈念館で児童養護施設の子供たちを前にした講演のときだが、講演を依頼したのはこの施設出身の亀田だった。翌日、山岡は優太をかつて炭鉱で栄えた池島に案内する。無人の住宅街や炭鉱アパートの廃墟を歩いたあと、優太が朋美に死ねと言ったことについて「想像力のない言葉は人を傷つけます。それをよく覚えておきなさい。いいですね」と諭す。池島のあと優太は長崎でやり直したいと朋美に打ち明けている（第六回）。亀田の提案から、優太が変化していく流れが生まれており、原爆後の荒野と炭鉱の荒野が優太のなかで沃野に変わろうとしている。

　亀田自身も、池島のあと優太が作った砂漠（荒野）のジオラマを見て理由もなく涙するように変化の兆しが見られる。また、山岡が子供たちに講演した日は山岡の誕生日で、そのことを知っていた亀田が優太に相談して、朋美も含めてケーキでお祝いする。「先生はもっともっと長生きして語りを続けてください」と話す亀田がこの日の講演を企画したのも、山岡へのある種の贈り物だったのかもしれない。その講演は文章をそのまま読み上げるような一方的なものだった。山岡は自分の話に耳を傾けてくれる人はほとんどいないようだと肩を落とすが、この方法では子供たちが不満を口にするのも無理はない。講演をそばで見ていた優太から励まされ、池島のあと中町教会での二回目の講演では、原爆の絵を見せながら語り、講演後に子供たちから拍手や質問をもらうという明らかな変化が見られる。誕生日が新しい一年が巡ってくる日であることを考えると、山岡も池島のあと再生の一歩を踏み出しているといえる。

第六回「妻と夫」

　優太が作った砂漠のジオラマを見て、章吾は涙を流す。朋美は章吾を疑った自分を恥ずかしく思う。そんな折、百音に乗り逃げされた車が大阪で見つかり、朋美と浩光は警察で鉢合わせする。盗難の疑いで取り調べを受ける百音。朋美は、車を百音にあげたと証言する。浩光は朋美に帰ってこいというが、朋美は拒否し「もっと大人になりなさい」と去る。

　桜田も亀田と同じくドラマでは再登場する。小説では盗まれた車はホームレスに譲っていたが、ドラマでは桜田が乗り続け、家代わりにしていた。荒れ果てた車内は、夫に裏切られて行き場を失った桜田の「荒野」を表現する。桜田は第七回にも登場し、嬉野温泉で住み込みの仲居をしながら歌う仕事を目指す。桜田もまた荒野の体験を沃野へと変えていこうとしている。

他にもドラマだけの場面は多い。浩光が仕事で失敗する夢を見ること、山岡が読んでいた松尾あつゆき『原爆句抄』を優太や朋美も読み始めること、亀田が松尾あつゆきの句碑を訪れたりスケッチブックに老婦人や平和公園の絵を描いたりすることなどである。松尾あつゆきの句は「八月九日被爆、二児爆死、四才、一才、翌朝発見す／こときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる」「長男また死す、中学一年／炎天、子のいまわの水をさがしにゆく」「ほのお、兄をなかによりそうて火になる」「降伏のみことのり、妻をやく火いまぞ熾りつ」「子のほしがりし水を噴水として人が見る」「あわれ七ケ月のいのちの、はなびらのような骨かな」「まくらもと子を骨にしてあわれちちがはる」「炎天、妻に火をつけて水のむ」が引用され、山岡が父母妹を原爆で失ったこと、妹のために水を探しに行ったエピソードの下敷きになっている[14]。

大阪での朋美と浩光の再会は小説にもあるが、ドラマでは浩光から「だいたいお前なんかに何ができるんだ。何もできないくせに。何をえらそうに」となじられた朋美が「だから今度こそあきらめたくないの」「今までみたいに生きていたくないの」と明確に意志を伝える。すでに朋美はこの場面以前から新しい取り組みを始めている。山岡の誕生日の日、三浦の食堂を首になるが、居酒屋の昼のアルバイトを紹介してもらう（第五回）。それをきっかけに篠崎という客と出会ったり、高齢者向けのランチサービスができないか亀田と考えたりする。ドラマは小説の結末よりも早く、沃野へ踏み出す朋美の再出発を描いている。

第七回「悪魔と天使」

山岡家に弁護士が押しかけ、章吾が老女から詐取した金を返せという。信頼を裏切られた朋美は、章吾を山岡家から追い出す。山岡は幼馴染みの篠崎から、原爆症の妹と結婚しなかったことを責められる。朋美たちが夕食を食べていると、章吾が山岡から詐取した金を返しにくる。山岡は章吾を招き入れ「私は深い罪を犯した」と告白を始める。

これまで山岡が語ってこなかったことが明らかにされていく回である。かつて結婚まで考えた女性がいたが、三〇年前に原爆症で亡くなっていること、山岡も二年前から前立腺がんを患っていること、「廃墟に立つ少年」が山岡だということである。いずれもドラマだけの挿話である。先に見たように原作者の桐野夏生は新聞連載後、山岡が原爆で許嫁を亡くしたとコメントしているが、許嫁の存在は小説では書かれていない。作者の発言をドラマ制作者が知っていたのかは分からないが、原爆

のために結婚できなかった話はドラマで表現されることになった。

山岡が「廃墟に立つ少年」は自分であると語るのは、優太から写真の絵を見せられ、少年について教えてほしいと言われたからである。この絵は優太によるもので、詐欺行為が明らかになった亀田が去ったあと祈念館に出かけて描いている。前回亀田がスケッチブックに絵を描いていたが、亀田を慕う優太はこれに倣ったのであろう。亀田は金を返し謝罪を述べるために山岡家に戻ってくるが、山岡が「みんながそろってよかった」と、これまで人前で話してこなかった被爆死した妹の記憶を語り始める。ここでも亀田が欠かすことができない。

最終回「告白」

山岡は、朋美、優太、章吾に、原爆投下直後の長崎で決して許されない罪を犯したと告白する。朋美は、山岡に会って救われたと感謝の気持ちを伝える。山岡は、自分こそ朋美に会って救われたのだと語る。優太は山岡の告白に心を動かされ、若者が原爆の語り部を引き継ぐ活動に参加し、山岡の言葉を伝えたいと言い出す。一方、章吾は警察に出頭する決意を固める。

小説の山岡は現在九二歳で、原爆投下当時は長崎市内の国民学校の代用教員をしていたが、偶然の市外の実家に帰省していたため助かっている。年の離れた赤子の妹は原爆投下以前に肺炎で亡くなっている。これは、少年の山岡が妹の氷枕の口をよく締めなかったために、氷水がこぼれ風邪を悪化させたためである。原爆以前の妹の死が、大量死や人間の魂について考える出発点になっている。このことを今まで人前で話すことはなかったと、亀田が手配した福島の講演の中で山岡は話している。山岡の福島での「得難い経験」には亀田が大きな役割を果たしている。

一方、ドラマの山岡は昭和九年生まれの八〇歳である。一〇歳のとき学童疎開で島原に行っていたが、用事で長崎に戻る途中、長与駅で被爆する。線路を歩き瓦礫を進むと父母の死体があった。ここまでの体験は他の回でも何度か山岡が語っているのだが、その先に妹が倒れていたことは最終回で明かされる。山岡は被爆した妹が欲しがった水を自分が飲み干したために死なせてしまったという罪意識を抱えながらこれまで生きてきたことを朋美、優太、亀田の前で告白する。

山岡の告白を受けて、亀田も池島で自身について語り出す。母親が池島の店で働いていたこと、五歳のとき施設に引きとられたこと、顔を知らない父親は炭鉱夫だったらしいこと、一〇

歳のとき祈念館での山岡の話と「廃墟に立つ少年」の写真に印象を受けたこと、施設を出て以来人を騙しながら生き、人を救った気になっていたことなど、亀田の自己開示は愛情に恵まれなかった嘘つきの自分の人生の否定に向かう。しかし、出頭前にやり残したこととして老婦人を介護施設に送り届けたとき、婦人が亀田の耳元でささやく「好きよ。嘘つき」という言葉は、亀田の行為を肯定するものである。亀田は朋美に会って救われたというが、本当の救いはこの老婦人の言葉にあるのではないだろうか。

## 4　可能性と問題点

このように小説のドラマ化にあたっては、人物の再登場、人物設定の変更、場面の変更、新しい人物の登場、新しい場面の追加を行いながら、原作にある「荒野を沃野に変える」イメージを、朋美以外の人物にも押し広げている。特に亀田はドラマのキーマンとして、山岡、朋美、優太が変化するきっかけを作っており、小説で描かれなかった亀田の「荒野」も詳しく描写されている。山岡が一〇歳のとき被爆し、亀田が一〇歳のとき山岡の話と写真に印象を受けたように、人物間の「荒野」の重なりも見られる。

またドラマ独自の表現として、山岡の原爆体験をジョー・オダネルの写真と松尾あつゆきの俳句を素材にして再構成していることが注目できる。ドラマの放送は二〇一五年一月から三月だが、同年は、松尾あつゆき著・平田周編『原爆句抄―魂からしみ出る涙』（書肆侃侃房、二〇一五・三）、小﨑侃『慟哭―松尾あつゆき「原爆句抄」木版画集』（長崎文献社、二〇一五・五）、平田周『このかなしき空は底ぬけの青―消せない家族の記憶１９４５・８・９』（書肆侃侃房、二〇一五・八）と復刻版や関連本の出版が目立つ。前年から撮影されたドラマは、一足早く松尾あつゆき作品の再読・再評価をしたことになる。ジョー・オダネルの「焼き場に立つ少年」の写真については、最近でもローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が写真に「戦争をもたらすもの」というメッセージを添えたカードを配布して話題となった[15]。松尾の俳句やオダネルの写真がそれだけで終わるのではなく、新しい物語を生み出す可能性を持つことをドラマは実践的に示している。

また絵画を使った原爆の語りも映像作品ならではの方法である。最終回の語り部の会で、優太は自分が描いた「廃墟に立つ少年」の絵を示しながら、部屋に引きこもっていた自分が長崎に来て山岡と出会い変わっていったことを話していく。絵画という表現を用いることは、優しい兄のように接してくれた亀田

に倣ったものである。優太の変化には亀田の支えもある。

絵は山岡にとっても、人が自分の話に耳を傾けてくれる手助けとなった。山岡が施設の子供たちに見せた絵の作者は誰か分からないが、最終回で亀田が家を去る前の荷物整理でその絵を持って眺めている。亀田に被爆体験はもちろんないので、山岡の話を聞いて絵にしたのかもしれない。被爆の惨状を伝える絵が亀田によるものだとすれば、二回目の講演に亀田はいなかったものの、講演の語り手は山岡と亀田の二人だったことになる。最終回で山岡の体験を優太が語るような共同の語りを、第五回の場面は先取りして描いていることになるだろう。

ドラマは小説を基本としつつ、写真・俳句・絵画の要素も取り入れて、原作の可能性を押し広げている。ただし問題もあることを指摘しておきたい。ひとつは、山岡にとっての妹の死の意味である。原作では、原爆以前の妹の死が、山岡が大量死にこだわり続け、人間の魂とは何かを考え続ける原点になっている。原爆とは直接関わりがない死だからこそ、山岡は広島原爆、長崎原爆、東京大空襲、阪神淡路大震災、東日本大震災、原発事故といった様々な問題の共通性を見ようとしているのである。これがドラマになると、妹の死は原爆との結びつきに限定される。原作にあった山岡の思想がドラマでは切り詰められてしまったのではないだろうか。

また新しく描かれる炭鉱だが、池島の廃墟や孤島のイメージを物語に新しく取り入れたことは、原作の「荒野」の可能性を引き出す手法としてまずは評価したい。同じ長崎の炭鉱跡や島でも、ドラマと同年に世界文化遺産に登録された端島（軍艦島）であったなら、より注目はされたかもしれないが寂寥感は出なかっただろう。ドラマでは、山岡は優太を連れて無人の街を歩き（亀田の母が働いていた店の前も通る）、コンクリート造りの炭鉱アパートの中で「昔は大勢の人が暮らしていました。哀しい景色です」と語る。池島は無人島であるかのように描かれているが、現在も住民が暮らしている[16]。建物の廃墟のみがクローズアップされており、炭鉱の持つ歴史性や特有の坑内労働のイメージは生かされていない。

その炭鉱とつながるのが亀田である。本稿で繰り返し述べてきたように、ドラマにおける亀田の役割は大きい。亀田役の高橋一生の好演もその印象を強めている。だが亀田が炭鉱にルーツがあることと人を騙して生き続けてきたことが十分に関連付けられているとは言い難い。亀田が人を騙し続けてきた人生の背景として、炭鉱夫だった父親の顔を知らず、母親の元を離れて児童養護施設で暮らしてきたため、両親から十分な愛情を受けられなかったというような説明は、単純な種明かしのようである。小説の亀田は再登場せず背景が詳しく語られないことに

よって、逆に簡単には理解できない「荒野」を抱えていることを印象づける。亀田のあり方については検討の余地がある。

ドラマ『だから荒野』は原作の「荒野」の可能性を引き出したが、「炭鉱」のイメージを十分引き出したとは言い難い。松尾あつゆきの句やジョー・オダネルの写真がドラマでリメイクされたように、ドラマ『だから荒野』から次なる作品が生まれるのかどうか。今後注視したい。

## 注

1 楠田剛士「炭鉱」（川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』青弓社、二〇一七・九）、楠田剛士「「炭鉱と原爆の記憶」を考える」（「原爆文学研究」一七号、二〇一八・一二）参照。

2 例えば震災後に話題を集めた開沼博『「フクシマ」論―原子力ムラはなぜ生まれたのか』（青土社、二〇一一・六）は、原発立地の前史として「現在の原子力ムラである福島県富岡町・楢葉町付近から茨城県北部までの地域には、筑豊炭田、北海道炭田と並ぶ大炭田である常磐炭田があった」ことに注目する（一八九頁）。炭鉱と原発が共に「中央の都合による国家の末端に対する統制の政策の変化とエネルギー政策の転換」によって翻弄されてきたこと（一九三頁）、植民地主義やグローバリズムに通じる「排除・固定化と隠蔽のメカニズム」（三五〇頁）が労働に見られることを指摘している。

3 全二五二回。休載なし。金子しずか画。毎月一日に冒頭に「あらすじ」が掲載。

4 「だから荒野　来年一月から連載の桐野夏生さん」（「毎日新聞」二〇一一・一二・二八夕刊）

5 桐野夏生「だから荒野　連載を終えて」（「毎日新聞」二〇一二・九・二〇夕刊）

6 連載後であっても、桐野は震災や原爆のことを触れない場合がある。「W新刊記念赤裸々対談『毎日かあさん⑩』西原理恵子VS.『だから荒野』桐野夏生　世の夫たちは犬を見習おう！」（「サンデー毎日」二〇一三・一一・一〇）、桐野夏生・西原理恵子「積み重ねた「他力本願」が心のよりどころを奪う」（「婦人公論」二〇一三・一一・二二）。

7 井口時男「だから荒野　桐野夏生著　めげない主婦の成長の旅」（「日本経済新聞」二〇一三・一一・一〇朝刊）

8 速水健朗「解説」（桐野夏生『だから荒野』文春文庫、二〇一六・一一）

9 茶園梨加「語り部」（川口隆行編著『〈原爆〉を読む文化事典』前掲注1）

10 楠田剛士「桐野夏生『だから荒野』における師弟のわけ」（「叙説Ⅲ」一七号、二〇二〇・一）

11 銭谷雅義「水をめぐる冒険」http://www.nhk.or.jp/80/drama/

dakara/html_dakara_midokoro.html（二〇一八年九月二九日閲覧。二〇二〇年一月九日現在リンク切れ）

12『だから荒野』（発行＝NHKエンタープライズ、販売＝東映株式会社・東映ビデオ株式会社、二〇一五）

13ジョー・オダネルの写真については、吉岡栄二郎『「焼き場に立つ少年」は何処へ―ジョー・オダネル撮影『焼き場に立つ少年』調査報告』（長崎新聞社、二〇一三・八）が詳しい。

14引用は、松尾あつゆき著・平田周編『原爆句抄―魂からしみ出る涙』（書肆侃侃房、二〇一五・三）。

15「朝日新聞」二〇一九年一一月二二日朝刊。

16ドラマ放送が始まった二〇一五年一月末の段階で、長崎市池島町の世帯数は一二九、人口は一九七人（男性一一四人、女性八三人）である。「住民基本台帳に基づく町別人口・世帯数（各月別）」https://www.city.nagasaki.lg.jp/syokai/750000/752000/p023436.html（二〇二〇年一月九日閲覧）

※本稿は科学研究費補助金（19K13056）の助成を受けた。